

演題 下顎遊離端欠損症例にインプラントを応用し
バーチカルストップの確立を目指した症例

演者名 栗原健一

日付 2006年10月24日

keywords

1. CR と CO
2. 咬合調整
3. インプラント埋入

抄録

患者は2006年5月25日に右下7の自発痛を主訴で来院した。当日応急処置(抜髄処置)を行い、後日カリエスが骨縁下まで達していたので抜歯した。その後全顎的な検査を行った。

左側顎関節頭に軽度の骨の平坦化があるも、自覚症状はなく運動領域にも制約がなかったため、顎関節は経過観察することとした。

右上45, 左上5, 右下6, 左下5に咬合性外傷によると思われる垂直性の骨吸収像が認められたので、CRポジションにてマウントし、咬合調整を行い咬合の安定を図った。また左下67欠損部にはインプラントを応用して咬合支持の拡大を行い、左上45の咬合力の負担軽減を図った。右下7も抜歯窩の治癒後、インプラント補綴による右下6の咬合力の負担軽減を行う予定である。

治癒期間も短く、右上45、左上5、右下6、左下5の垂直性の骨吸収像には、X-Rayにおいても明確な治癒像は確認できておらず、同様にまだ認められる。

咬合性外傷による著しい骨吸収の進行をこのトリートメントプランニングで歯止めすることができるのか、諸先生方のご指導お願いします。